

ぐんまの魚の生息環境を考える(10)

ヤリタナゴの小溝

はじめに

群馬県内の自然環境下で生息する在来種のタナゴの仲間は、藤岡市内のヤリタナゴだけです。実はこのヤリタナゴの小溝は子供の頃の遊びの場であり、私の“春の小川”なのです。県のレッドデータを編集する折に、天然のタナゴ達は“絶滅”と記載される間に、私が生息情報を提供し再発見につながった経緯があります。

ヤリタナゴ達は生きている貝に産卵し繁殖するという特殊な生活史を送ることは皆さんご存じのとおりですが、産卵に利用する貝は、マツカサガイという貝で生息する場も限られています。

今、このヤリタナゴとマツカサガイが棲む区域に“ほ場整備”が計画され、事業が行われようとしています。工事が行われれば、大部分の生息する水路は埋められ、別の場所に三面張りコンクリートの直線水路が設けられると思われます。就農者の高齢化が進んで、現在の土水路の維持管理が難しいこと及び画一的な大きな区画が農作業に効率的であることが事業実施の主な理由です。このまま事業が進行すれば、自然環境におけるヤリタナゴ達の生息は県内から消えることになりそうです。こんな状況があることから、今回はヤリタナゴの棲む環境を考えたいと思います。



昔、湧き水が水源であった小溝。野菜や鍋釜などを洗い、生活の場でもあった。現在も、当時の洗い場が残っている。

1. タナゴ達の棲む小溝

タナゴ達の小さな川は、昔から2つありました。一つの川は、水源が湧水で途中から神流川からの農業用水が合流する川で、小さなヤマメをはじめとして非常に多くの種の魚が生息していました。もう一つの川は、少し幅が広く(2~3m) 神流川からの農業用水が流れ、温井川(烏川)と生態的につながっていました。6月の田植時には代掻きした田にアユが迷入したこともあります。湧水は、昭和30年代後半の神流川の河床砂利の大量採取による影響により涸れてしまいました。この小溝は、神流川の氾濫原を流れていますので、河床は砂礫主体です。

小溝の蛇行が著しい場所は戦前にショートカットされ一部コンクリート化されましたが、その他の部分は現在まで、おそらく数百年以上前の形状が残っているものと思われます。現在まで古い小溝が残った理由は営農形態による影響が大きい。この地区は昭和30年代からハウス栽培が始まり稲作への依存度が相対的に低かったことが、ほ場整備を阻んだと言えます。この結果、水路自体が自然遺産とも言える小溝が残ったものです。もう一つの大きな理由は、営農に関係なくこの地区に住む人は水路の維持管理作業に参加する義務を有し、水路の管理が行われたと言うことです。

産卵に利用するマツカサガイ
小さいのがマシジミです。



ところで、小溝のヤリタナゴばかりが目立っていますが、実は産卵する貝の生息が重要なのです。タナゴ達が絶滅したのは貝が生息できる環境がなくなってしまったことが原因と考えられます。極端な言い方をすれば、ヤリタナゴは相当汚れた水環境でも生息が出来ますが、貝は限られた生息環境が必要なのです。このマツカサガイは“息”の出来ない粘性土の河床には棲めません。また、貝のエサとなるプランクトン等が水路に流れることも必要です。

タナゴ達は水が温かい時期には、流れに出っていますが、外敵等が現れると草陰等に隠れます。水の冷たい真冬には、軟らかな河床堆積物に潜ったりするため、タナゴ達は水路から見えなくなります。毎年3月の第一日曜日に行われる水路の清掃時(堀浚い)頃に、泳ぐ姿が見え始めます。

タナゴ達が棲む水路の際は、
植生によりカバーされる。



国の天然記念物である
ミヤコタナゴの棲む水路
(栃木県)
藤岡の水路と良く似ています。



2. ほ場整備事業

このタナゴ達が棲む地区がほ場整備されることになり、“環境と調和した事業”が計画されるようですが、タナゴ達をどうするかこれから考えて行くことになります。水路は直線でメンテナンスフリーのコンクリート化されないと事業の実施意義がないでしょうから、タナゴ達の棲む水路を別に考える事になるかも知れません。

市内の他地区で作られた中途半端な水路は、前例とはなりそうにありません。“環境水路”の維持管理を地元だけに押しつけるやり方は問題がありますし、タナゴ達の生息を目指す水路を作るのであれば、ほ場事業の枠を超えた仕組みを導入する必要があると思われ、従来の延長線上に答えを求めるとは無理があると思います。現在の事業実施の仕組みは、タナゴ達にとって“絵にかいた餅”のようなものだと思います。

昔あった水車やタナゴ達の棲む水路を“遺産としての農地”とし、維持管理が上手に行われ、現代にマッチするハイテクで地球に優しい仕組みを必要だと思われま。

(日本一のアユを取り戻す会 福田睦夫)